

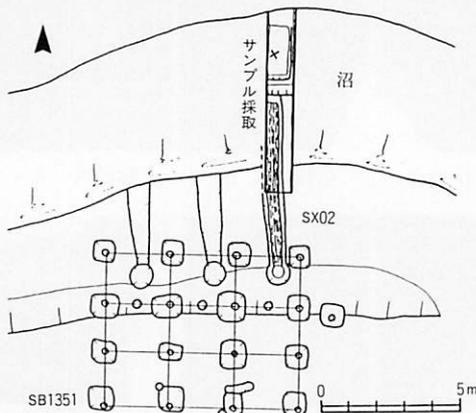
動物遺存体の調査(11)

埋蔵文化財センター

本年度の動物遺存体の調査は、長崎県教育委員会の行う壱岐、原の辻遺跡、愛媛県埋蔵文化財センターの行った松山市宮前川遺跡北齊院地区が主であった。原の辻遺跡では、哺乳類として、クジラ類、イルカ類、アシカと、イヌ、イノシシ、シカ類が、魚類では、サメ類、マダイ、フグ類、ベラ類などが多く出土している。山陰地方から西北九州にかけての日本海沿岸では、近年までニホンアシカの生息地であったこともあり、弥生時代にも壱岐の周辺に多くのアシカが生息していたことがわかる。陸生哺乳類では、ニホンシカに比較して格段に大きい、大陸に生息するアカシカ相当の角座を持つ前頭骨が存在し、骨角器の素材として搬入されたものと思われる。さらにイヌの骨が300点余り、最小個体数で50個体以上が出土したが、埋葬は見られず、溝中に遺棄、散乱状態のものばかりであった。イヌの骨の一部にも他の食料となった動物の骨と同様に、解体痕が存在したことから、多くのイヌが人々の食用となったことが推測できた。京都大学霊長類研究所の茂原信生氏によると、縄文犬の系統を引く小型のタイプと、北方犬に見られる中型のタイプなど、さまざまなイヌが存在するという。さらに帯広畜産大学の石黒直隆氏に依頼し、出土した犬骨からDNAを抽出することを試みつつある。今後、縄文犬や中世犬のDNAの抽出を試み、さらに朝鮮半島や沿海州の遺跡出土のイヌのDNAの配列が明らかにできると、日本犬の系統も、一層明らかにできるであろう。

宮前川北齊院地区の調査では、全国的にも類例の少ない弥生時代末から古墳時代前期にかけての動物遺存体が出土している。種類としては、シカ、イノシシ、ノウサギ、ネズミ類などの哺乳類と、スッポン、カエル類、サメ類、マダイ、クロダイ、スズキ、コブダイ、ハタ類などが出土した。弥生時代の集落の環濠からの出土例に比較すると、量的には少ないという印象を持った。

便所遺構の調査では、秋田城の第63次調査で検出された3×3間の総柱建物の現地指導を行った。この建物は東西3間(2.4m等間)×南北3間(1.8m+1.8m+2.1m)で南側に庇を持つ構造で、北の3室には、それぞれ、直径0.8m前後の円形の掘り込みがあり、その底から北にひろがる沼地に向かって木樋が埋め込まれていた。木樋の流れ出した溜まりの部分に堆積した土壌のフローテーションを現地で実施し、糞虫、種実類を採取し、この施設が便所であったことを確かめた。また寄生虫、花粉、昆虫、コプロスタノールなどの分析用に土壌サンプルを採取し、それぞれの専門家に分析を依頼し、この施設が便所建物であったことをさらに証明した¹⁾。



秋田城第63次調査検出の便所建物
(秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所編
『秋田城跡(平成6年度)』1995より作成)

その他の便所遺構としては、広島県教育委員会の行う吉川元春館跡(中世)、石川県鹿島町教育委員会の行う石動山大宮坊(近世)の現地指導を行い、土壌を採取し、それぞれの専門分野の研究者に分析を依頼した。特に大宮坊では、天理大学天理参考館の金原正明氏によって、種実にアワ、ヒエなどが多いことが判明し、僧侶の質素な食生活が裏付けられた。また、吉川元春館跡の便所では帯広畜産大学の中野益男氏の分析でコプロスタノール：コレステロールの比率が男性の排泄物に近く、男性用便所の可能性が強いという結果が出た。

(松井 章)